

## ラヴィルマルケとリユーゼル（七）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁川英俊

### X 『ド・ラヴィルマルケ氏の「バルザズ・ブレイス」の歌の真正性について』

ブルターニュ民謡とは何か

では、その小冊子のなかでリユーゼルは具体的にどのようなことを書いていたのか。ここで『ド・ラヴィルマルケ氏の「バルザズ・ブレイス」の歌の真正性について』の内容を簡単に辿ってみることにしよう。

まずはこの小冊子の構成から見よう。先述したように、この小冊子には本論の前に「前書き」が付されている。そこでは冒頭に、すでに引いたサン・ブリューの会議の前にリユーゼルがラヴィルマルケに宛てた手紙の全文が掲載され、この会議における詳細も含めて、著者がこの小冊子を出版するに至った経緯が紹介されていた。続く本論はローマ数字で番号を付された二つの部分に分かれる。以下、その最初の部分から概観しよう。

著者はまずブルターニュの歌の歴史を古代ガリアまで遡って説き起こす。そこではつねに『バルザズ・ブレイス』の「序文」が意識され、ときにそれとは相反する主張が展開される。たとえば、リユーゼルはまずブルターニュの詩人の祖先は

古のバルドであるとしながらも、ラヴィルマルケのように話をケルト圏全域にまで拡張しようとはせず、その範囲をあくまでもガリアに限定しようとする。著者はさまざまな文献を引いてその昔日の栄光を語り、バルド全盛期の六世紀に活躍したアナイリン、ヒヤワツヘン、タリエシン、メルランの名を挙げつつ、しかしこう付け加えるのを忘れない。「しかしわれわれはガリアの外には出ないでおこう。それはわれわれの限界を超えるだろう<sup>(1)</sup>」。

実際、ここで著者がしきりに強調するのは、ケルト圏におけるガリアの特殊性である。そこではバルドの地位がかなり早くに低下し、しかもローマの侵略によってその歴史が早々と途絶えてしまったため、資料にも乏しい。それゆえ、ことこの問題に関しては、彼らの足跡を十五世紀まで辿り得るアイルランドやウェールズとガリアを同列に論じることはいないのである。リユーゼルは『バルザズ・ブレイス』の「序文」の冒頭に掲げられていた「もしガリアのどこかにドルイドの伝統を継ぐ詩人がいたとすれば、それはアルモリカ以外にあり得なかつたろう」というアンペールの言葉を引きながらも、しかしラヴィルマルケとは対照的に、たとえ今日まで伝承されているものがあるとしても、わずかの諺や俚諺か詩句の断片にすぎなからうと述べる。そのうえで彼の考察は、ラヴィルマルケがその成立が五世紀に遡るとした『グエンフランの予言』へと向かう。

この詩に関して著者はまず、一七五二年に出版されたルペルティエ師の『ブルトン語辞典』に触れる。その「序文」のなかでタイヤンディエ師は、「ルペルティエ師が見つけた最も古い手稿は一四五〇年の手稿で、グイングラフ Gwinglaff という名の自称予言者の予言集である」と書き、ルペルティエ師自身も当の辞典のなかでこの予言者の詩を二行引用した。また、グレゴワール・ド・ロストルナン神父も、ランデヴェエネックの僧院でルペルティエ師がこの手稿を所持していたことを確認している。にもかかわらず、リユーゼルはその詩句がこの予言者が生きていた四五〇年まで遡るかは疑わしいと言う。

なぜか。理由はおもに二つある。まずそうした詩が、ラヴィルマルケの収集した歌と同様、その時代の言葉で書かれていないこと。いまひとつは、この予言者がトレギエ地方に住んでいたとされるのに、現在この土地の民間伝承のなかにその痕跡が何も残っていないことである。たしかに、ラヴィルマルケはその歌集のなかで、グエンフランはロストルナンが生きていた十八世紀はもちろん、いまでもブルターニュでは有名であると述べていた。しかし、この地方に生まれ、そのあらゆる種類の伝承を研究した者として、リユーゼルはその記憶はもはや民衆のなかにはまったく見当たらないと断言する。「似たような名前を聞いたことがあったが、それも一、二回である。たとえば、メネ・オムの麓のルアルガットで、ある老婆がこの山の頂にはかつてワルフラン *Warc'hlan* がいた、と話してくれたことがあった。(……) 彼女はそれが人間なのか動物なのかも分からなかった<sup>(2)</sup>」。

もちろん、著者はその種の名前をもつ予言者が五世紀にいて、その歌や詩が口頭伝承によって現代にまで伝えられたという可能性まで否定するわけではない。実際、グエンフランのものとされる諺や俚諺は、ペンゲルンのコレクションのなかにも見いだされるのである。にもかかわらず、リユーゼルはその同定を疑問視し、それは特定の個人というより広く民衆に帰すると考えるのが妥当であるとする。さらにロストレナンやルペルティエ師が引用したランデヴェネックの手稿についても、彼はそれが十五世紀に筆写されたものであり、その内容が五世紀のバルドに帰するとするのは行き過ぎだと考える。そもそもロストレナン神父もルペルティエ師も、これほど貴重な資料が手元にありながら、それをわずか二度しか引用していないというのは奇妙ではないか<sup>(3)</sup>。

こうしてリユーゼルは、『バルザズ・ブレイス』の「グエンフランの予言」は、ルペルティエ師とロストルナンが引用した詩句や、オーウエン・ジョーンズの『ミヴィリアン』や六世紀のウェールズのバルドたちの作品を参考に創作されたものだとして推測する。十世紀以前の歌が今日まで完全な形で伝承されていることなどあり得ず、伝わっていたとしてもそれ

は諺や俚諺や詩句の断片がせいぜいだというのがリューゼルの確信だったのである。傍証として、彼は叔父ルユエルの次のような言葉を引く。「われわれのブルターニュ地方には、ナシヨナルな歌や伝承が数多くある。しかしそれらは比較的新しい時代に作られたもので、十四世紀以前に遡るものなど私は知らない<sup>(4)</sup>」。

その一方で、リューゼルは、ブルターニュには十六世紀から十八世紀にかけて作られた歌ならばたくさんあると言う。そうした歌の内容は、貴族の争いや権力の乱用や死刑執行や暴力沙汰とさまざままで、そこに描かれた風俗も十四世紀以前のものかと思えるほど野蛮だが、共通しているのはすべてが実際に起こった身近な事件であり、一般の歴史や遠方の出来事はほとんど取り上げられないことである。著者は次のようなルナンの一文を引く。「民衆の有名人が歴史上の有名人間であることは稀であり、過ぎ去った時代の風評が民衆的な経路と歴史的な経路という二つの経路を通じてわれわれのもとにやってくる時、この二つの伝承の形式が互いにきちんと一致することはほとんどない<sup>(5)</sup>」。

続けてリューゼルは、ブルトン語の「クレール」という語の意味に言及し、ラヴィルマルケが「神学校の学生」とのみ解釈したこの語には、実は十八世紀末まで、「読み書きができる人」といったもうひとつの意味があり、だからこそ彼らはグウェルスでもあまり立派な人物として描かれていないのだと指摘したのち、十六世紀末から始まるブルターニュの印刷された歌の歴史に触れてこう書く。

私の子供の頃、旅回りの歌手はまだ結構たくさんいて、彼らがとくに冬の夜、袋のなかに古いグウェルスや新しいソーンや色鮮やかな美しい聖人の画がいっぱい詰まった袋を抱えてやって来るのを、皆がどんなに喜んで迎えたかを憶えている。(……) このアルモリカの小ホメロスたちも、いまでは日に日に珍しくなり、遠からず完全に姿を消してしまうか、ほとんどいなくなってしまうことだろう。すでにブルターニュの田舎で行商人が売り始めている(……) 平板でつまら

ないフランス語の歌が、こうした自然で、独特で、ナショナルでもある産物に、ブルトン人がそのすべての信仰、習俗、感情、夢、そして心を注いだあの産物に取って代わってしまうだろう<sup>(6)</sup>。

ブルターニュの印刷された歌について語りながら、リュウゼルはこれまで最上の民謡が印刷されたことはけっしてなく、その作り手は心と意図において素朴かつ実直で、ほとんどいつも読み書きのできない正直な人間だったのだと強調する。が、その筆は昔日を回想する一方で、また彼らの対極にある現代のバルドたちにも向かい、彼らが平気で歌にフランス語を混ぜ、自分も理解できないことを書きながら、それを優れた作品だと思い込んでいると難じるのである。ともあれ、ガリアに始まったブルターニュの歌の歴史は、こうして話が「最後のバルドたち」に及んだところで幕を閉じる。

### 『バルザズ・ブレイス』への疑問

第二部ではいよいよ『バルザズ・ブレイス』が組上に載せられる。著者はルナンの言葉を使いながら、「二千年もまえに死んだ人」を論じるように『バルザズ・ブレイス』の著者を語るつもりだ、と自らの論述における誠実さと客観性を約束し、なぜいまそれが批判されなければならないのか、その理由を説明する。

一八三九年に『バルザズ・ブレイス』の初版が出版されたとき、民謡研究はまだ揺籃期だった。したがって、この時代にラヴィルマルケが学問的な方法を使わなかったからといって誰も彼を咎めることはできない。しかし、その後この分野ではさまざまな書物が出版され、学問的な水準も上がった。にもかかわらず、最新版でも著者がその方法を変えようとしていないのは見過ごすわけにはいかない。ラヴィルマルケは当然企図されて然るべき批評版を出版しようとしてもいないし、その理由を明らかにしようとしてもいないのだ。リュウゼルが問題視するのは、『バルザズ・ブレイス』の著者における、この学

問的誠実さの欠如なのである。彼は言う。「学問は決して停滞するものでも不動のものでもない。(……) 最新の研究動向に少しでも注意を払っている人ならば、(……) 意見や視点はそうした進歩に応じて変わらねばならないし、修正されなければならぬのだ(?)」。

たしかに、ラヴィルマルケは長く斯界のただひとりの権威であった。リユーゼルはこの立場が彼の知的誠実さに及ぼした影響を指摘しつつ、続けて『バルザズ・ブレイス』最新版の「前書き」と「序文」の記述に見られる誤りを列挙する。以下、順に追おう。

ラヴィルマルケは詩人と彼が歌う出来事や人物との同時代性を強調した。が、リユーゼルによれば、これは幾つかの場合には真だが、しかし多くの例外を含む。彼は自らの歌集からその反例を引く一方で、十三世紀末の人物であるウイリアム・テルやロビン・フッドを歌った歌が現れるのは、ようやく死後一五〇年を経過してからであるという重要な事実を指摘する。

むろん、すでに述べた「蛙の晩課」も問題になる。リユーゼルは、『バルザズ・ブレイス』を作るに当たって、他の収集家から少なからぬ歌を借りたが、にもかかわらず、そこに収録された歌は他の収集家のコレクションにはそのままの形で見つけることができず、それはとくに「蛙の晩課」において著しいと言う。なにしろ、他のヴァージョンでは支離滅裂で無意味なこの歌が、『バルザズ・ブレイス』においてはドルイドの教義にまつわる問答歌になってしまっているのだから。しかもリユーゼルは、「ドルイド」にせよドルイスにせよ、そんな言葉がブルターニュの農民によって口にされるのを聴いたことがないとさえ語る。

批判の矛先はまた、ラヴィルマルケが信奉する「ウォルター・スコットの方法」にも向けられる。この方法によれば、選ぶべきは最も詳細なヴァージョンであり、詩的でない箇所はより詩的な表現に置き換えられ得る。が、リユーゼルはこ

れを批判的方法とは相容れないとし、「詩的ではない」として捨てられる節が重要な特徴を含んでいることもあるとする。ガストン・パリスの主張を紹介する。パリスによれば、年代記で異った稿本を混ぜこぜにするのが許されないように、民謡のヴァージョンを混ぜこぜにすることも許されないものであり、ラヴィルマルケの方法は、ある歌のレオン方言版をコルヌアイユ方言版よりも優美だからという理由で採用する程度の、信頼性に乏しいものなのである。

さらに著者が指摘するのは、『バルザズ・ブレイス』における聖職者批判の歌の不在である。十六世紀から十八世紀まで、民謡のなかでは聖職者が酷評され、実際その種の歌はこれまでも数多く採集されている。しかしラヴィルマルケはその歌集からこの種の歌をまるごと排除し、まるでそんな歌は存在しないと云わんばかりである。これはブルターニュの真の民衆史を作ると公言する歴史家が取べき態度ではない。

加えてリユーゼルは、ラヴィルマルケが強調した歌と歴史的事実との一致も疑問視する。たしかに『バルザズ・ブレイス』には、ブルターニュの歴史上の人物や出来事に関する歌が多くある。しかしリユーゼルは、まさにこの一致こそが歌集の真正性を疑わせるのだとして、再びガストン・パリスの批評を引く。

これは一般論として言うことができるが、どんな性質の資料であれ、それが絶対的な保証なしに提示され、まさにわれわれの知識が思った通りのもの、単純に期待通りのものであった場合には、その資料はほとんどつねに贋物なのである。(……) 一般に、真正の資料は幾つかの点でそれまでの情報を変更し、多くの場合反古にする。人は資料のなかに見いだせると思うものをそのまま見いだすことは決してないし、あまりにも期待に答えすぎているものはそれなりの理由があるのだ(8)。

要するに、ラヴィルマルケは都合のいい歌を見つげすぎた。しかも他に同様の歌を見つけた人がいるという話も聞かない。もちろん、それは単にラヴィルマルケが幸運だったということなのかもしれない。しかしふつう歌が消えるのに、四五〇年はかかる。一八三五、六年には残っていた二〇篇ばかりの歌が、いまは跡形もないということがあるのだろうか。しかも、故郷のトレギエはブルターニュで最も口頭伝承が豊かなところなのに。

こうしてリユーゼルは、ラヴィルマルケの手口を明らかにすべく、自分の歌集と『バルザズ・ブレイス』のそれぞれから「ロスマルション」と「デュ・ゲ克蘭の代子」という相似た内容をもつ詩を引き、そのうえで、ラヴィルマルケがいかにして素朴な田舎の歌を詩的・文学的かつ愛国的な歌へと仕立て上げていったのか、その手口を推理していく。いわく、後者のきわめて詩的な歌の冒頭部分はまったく作者による創作で、前者にはゲ克蘭やロジェルソンの有名な名前がはまったり登場せず、もちろんデュ・ゲ克蘭とロジェルソンの会見のエピソードも完全な創作で、ラヴィルマルケがデュ・ゲ克蘭をこの歌に登場させようと思いついたのは、たぶんあるヴァージョンに見える「グレスケル」という語のゆえであろう、云々。

### 『バルザズ・ブレイス』は贗物である

こうした手続きを経てリユーゼルが下す結論は、次のようなものである。すなわち、『バルザズ・ブレイス』は二種類の歌からなる。

第一の歌は、ラヴィルマルケによって完全に創作された歌であり、そこには歌集のなかで最も古く、歴史的・文献学的な見地から最も重要とされる歌が含まれる(9)。作者はそこに描くべき出来事や人間、当時の思想・風俗・習慣・信仰などに關して、歴史家や年代記作家、詩人や口頭伝承を頼りに、あらかじめあらゆる情報を集めた。その手際は見事ではあつ



たが、しかし出来上がった歌には民衆歌特有の粗野さがなく、太古の野蛮な時代の歌にしては、趣味が良く、また洗練されすぎている。

第二の歌は、民衆によって実際に歌われてはいるが、著者によってあらかじめ用意された枠のなかに嵌め込むために手を加えられた歌である。そこでは無名の登場人物の名前が歴史上の有名人に置き換えられ、もともと何の関係もなかった歴史上の出来事や人物に結びつけられる。そしてリューゼルによれば、こうして作られた歌は『バルザズ・ブレイス』には文字通り枚挙に暇がないという。

以上のことから、著者は『バルザズ・ブレイス』は歴史的に見て偽物であると断言する。のみならず、彼はまたそれが文献学的に見ても偽物であると言う。そこで使われている言語はブルトン語圏の農民が使っているものとはほど遠く、著者によっていたるところで純化され、古風な表現に変えられている。フランス語は慎重に取り除かれ、ブルトン語に、それもときにすでに使われていないブルトン語に置き換えられ、それで足りないときは、ウエールズやコーンウォールの語彙までもが持ち出される。ラヴィルマルケは「『バルザズ・ブレイス』のテキストは、今日ブルターニュの田舎で話されているブルトン語の純粹さの正確なバロメーターである」と言うが、この歌集に収録されている歌の大半は、ブルターニュのどの地方の農民にも理解できないものなのである。これだけ言葉を改変して、その姿勢を文献学的と呼ぶことはできない。

こうしてリューゼルは、この書物の真偽に関する最終的な結論は、マクファーンソンの『オシアン詩篇』の真正性を判断したスコットランドの調査委員会の結論とほぼ同じになるとして、ヴィルマンの『フランス文学史講義』から次のような一節を引く。

きわめて理路整然とした係争作業の後、委員会はたぶん心ならずも以下の質問と回答に関する報告書を起草せざるを得なくなった。

第一に、スコットランドのハイランドにかつてオシアンの名で知られた詩篇が存在したか、またその価値はどのようなものだったか。

第二に、マクファーソンによって出版されたコレクションは本物か。

最初の点に関して、委員会はその詩篇が存在し、よく人口に膾炙し、心に触れる崇高な性質のものであったと答えるのに困難はなかった。

第二の点に関しては、委員会は断定的に答えるのは困難だと告白する。彼らが採集した詩の断片には、よくマクファーソンが翻訳刊行した詩と同じ内容のものや、ときに詩句の表現に至るまで同じものもあつたが、タイトルやテーマが同一のものは一篇もなかった。委員会はこう判断した。著者はいつも欠落を埋め、ばらばらの断片をつなぎ合わせ、新しい詩句を入れ、文を削り、トラブルを緩和し、言語を磨いた。要するに、いまの耳にとって素朴すぎたり粗野すぎたりするように思われるところを変え、詩の理想に達しないと思われるところを取り除いたのだ、と。マクファーソンがこの種の裁量をどの程度加えたかは確定できないと委員会は付言する。

この判断がオシアン詩篇の真正性に大きな打撃を与えることは明らかである。しかしながら、それが賢明かつ良心的でありながら、なお愛国心による一種の偏向に駆り立てられてもいた審判員の口から出た言葉なのだ<sup>(10)</sup>。

民謡の贋作はヨーロッパでいつとき大きな成功を収めた。その代表とも言えるマクファーソンの『オシアン詩篇』やウオルター・スコットの『スコットランド辺境の民謡』は文字通り全ヨーロッパ的な人気を博し、フランスでもメリメの『ゲ

ズラ』や『カントルーブの歌』などの少なからぬ作品が、読者ばかりか批評家の目をも欺いた。では、こうした贋作はなぜ現れるのか。リユーゼルはここで再びガストン・パリスの言葉を引く。

偽文書が生まれる主な動機は四つある。すなわち利益、虚栄心、宗教、愛国心である。このうち最も見事で巧みな偽作を書かせたのは愛国心であり、そこで最も好まれた形式は叙事詩のそれであった。実際、この形式のもつ利点は計り知れない。まず、それは変わり易く、批評の厳密な方法を適用することが困難である。しかも、それは民族の過去について読者に与えたい情報を与えることができる上に、その民族の価値を高め、きわめて評価の高い詩的栄光をも与える。要するに、それは一般に幾分かは詩人である贋作者の想像力に適い、証書や年代記を作る場合に要求される綿密な探求を免除させるのだ<sup>(11)</sup>。

リユーゼルは『バルザズ・ブレイス』の著者を動かしたのもまた愛国心であった、と言う。彼は祖国のために一連の歴史的な美しい歌を夢見た。ひとりの靈感に溢れた詩人がいつの日かやって来て、一個の偉大な国民的叙事詩のさまざまな要素やばらばらの断片をつなぎ合わせて、完全で調和の取れた詩句を、ホメロスや『ニーベルンゲンの歌』に比較し得る不滅の詩を作るということがあってもいいではないか、とおそらく彼は考えた。そうなればブルターニュにとつてなんと誇らしいことだろう、と。この誘惑はブルトン語のように抑圧された言語の場合、とりわけ抗し難いものであったに相違ない。

しかし、そろそろ真実が明かされなければならぬ。著者は、『バルザズ・ブレイス』の資料的価値を信頼する歴史家や作家は大きな誤りを犯すことになる危険があると指摘し、遠からず歴史の領域から想像力が追い出されることを願って

稿を閉じるのである。

## XI リューゼルの批判の反響

ブルターニュにおける反応

リューゼルの論考は出版されるとさまざまな反響を呼び起した。とくに、それまで『バルザズ・ブレイス』をめぐる問題が一部の知識人にしか知られていなかったブルターニュでは、それを一般的な話題として認知させる上で大きな役割を果たした。以下、その反応の一端を紹介しよう。

まず、原稿の出版を勧めたサン・ブリュー司教ダヴィド猊下は、一八七二年九月三〇日付の手紙でリューゼルに宛ててこう書いた。「あなたの小冊子を読みました。(……)よくできていますね。これを読むとあなたがこうした事柄についてもっと頻繁に書かれてこなかったことが悔やまれます。内容に関してはド・ラヴィルマルケ氏からの返答があるまで、私の意見は慎ませてください。(……) いずれにせよ、これはブルトン語を愛する人にとって、きわめて興味深い問いです。あなたはそれを闘技場の中に投げ入れたのです。この闘技場には必ずや、それを向い討つ問いが、尊敬すべきド・ラヴィルマルケ氏なり他の人なりの姿をとって現れることでしょう<sup>(12)</sup>」。

一方、ブルターニュのジャーナリズムで好意的に取り上げたのは、カンパールの新聞『フィニステール』だった。この新聞は十月二八日付でこの小冊子の書評を掲げ、「形式においては大変抑制されているが、内容においては大変説得力がある<sup>(13)</sup>」と評して、こう書いた。「こうした仕事の後では、躊躇や留保はもはや不可能になる。ド・ラヴィルマルケ氏は彼が詩人として獲得したものを批評家としては失うのだ。この状況は何ら彼の自尊心を傷つけるものではなからうが、な

ぜ彼はそれをきっぱりと引き受けようとしなのだろう<sup>(14)</sup>」。

つまり、ここでも待ち望まれていたのはラヴィルマルケの登場であり、その明確な返答だったのである。しかし、それは必ずしもブルターニュにおける一般の声を代表するものではなかった。たとえば、『フィニステール』の書評が出る一週間前の十月二日、ブレストの王党派系の新聞『オセアン』に掲載された書評を見よう。それはリュウゼルの論考に対する反論ではなかったが、内容を見る限り評者がその主張を真剣に受け止めるつもりがないことは明らかだった。彼はこう書いていた。「どのような結果を得たいというのだろうか?……」私としては、こう打ち明ければならない。私がリュウゼルの言うところのたくさんの証拠とやらを手にしていることなどあり得ない。というのも、その手は最初から開かれてもいなかったのだから!<sup>(15)</sup>」

書評の著者は、『オセアン』の定期的な寄稿者だったジャン・サラウン Jean Salavin という人物だった。カンペールの書店主であった彼のところには、この小冊子の出版に際して、リュウゼル自身からそれを店頭に置いてもらえないかという打診があったが、論考を一読したサラウンは激した調子で彼に手紙を書き、それを「酷評する」と予告していたのである。つまり内容はともかく、この書評の登場はリュウゼルにとってすでに予想されたことであった。

一方、サラウンの書評を読んだリュウゼルは、彼に「真正の証拠に基づく冷静で真面目な議論」の必要性を訴え、『オセアン』紙上で「週一回の往復書簡」という形でこの問題を議論しないかと提案する。「一般的な考察の後で、われわれが『バルザズ・ブレイス』の歌をそれぞれ別々に吟味し、その比較研究を行なうこともできるでしょう。私が刺激的で有益な新しい事実を明らかにすることができることは保証します。しかしそのためには、感情的な理屈や、アプリオリな議論や証拠を、できるかぎり諦めなければなりません。(……) ペテンは三〇年以上も続いたのです。(……) ド・ラヴィルマルケ氏についてはこう言いましょう。私が攻撃しているのは、人ではなく方法である、と。人に関しては、彼は

祖国をたいそう愛したのですから、寛大に許されて然るべきでしょう<sup>(16)</sup>。

しかし、このリューゼルの願いが聞き入れられることはなかった。それどころか、事態はさらに悪化する。というのもリューゼルがサラウンの書評への返答として『オセアン』の編集部に送った原稿が、この新聞の編集長ゲヌボー Guenebault によって掲載を拒否されたからである。ゲヌボーはその経緯を十月二五日付のサラウン宛の手紙でこう書いた。

リューゼル氏がド・ラヴィルマルケ氏に対しておこなった行動の理由については、私はもう十分に承知していますので（なぜなら、ド・ラヴィルマルケ氏は貴族であり王党派であつて、リューゼル氏が羨むような名声を得ている人ですから）、私があなたの記事に修正を加えたり、加えるよう指示したりするわけがありません。（……）リューゼル氏は私に彼の側からの返答を掲載してくれと原稿を送りつけてきましたが、私はそれを拒否しました。理由は単純で、新聞がいちいち書評で取り上げた書物の擁護文まで掲載していたら埒が明かないからです。リューゼル氏が自分の属する陣営で自己弁護したければ『エレクトゥール』にすればいいのですから<sup>(17)</sup>。

ここでゲヌボーがその名前を出している『エレクトゥール』、すなわち『エレクトゥール・デュ・フィニステール』 *L'Electeur du Finistere* はブレストの共和派の新聞だった。つまりブルターニュにおいて、リューゼルの『バルザズ・ブレイス』批判をめぐる議論は、最初から本筋とは関係のない、王党派と共和派の対立という政治的な文脈のなかで捉えられてしまっていたのである。これではリューゼルがいくら「真正の証拠に基づく冷静で真面目な議論」の必要性を訴えたところで、受け入れられるはずはなかった<sup>(18)</sup>。その後ほどなくして始まる、『オセアン』と『エレクトゥール』の不毛で感情的な論争については、また改めて触れよう。ここでは、いましばらくリューゼルの論考がブルターニュにもたらした反

響を追ってみたい。

### サラウン宛の三通の手紙

リューゼルの小冊子の書評が『オセアン』に掲載されて以来、サラウンのもとにはさまざまな差出人から手紙が届けられていた。以下、その幾つかを見よう。最初に取り上げるのは、ほかならぬラヴィルマルケからのものである。日付はサラウンの書評が出た翌日、すなわち一八七二年十月二二日である。

親愛なるサラウンさん、あなたは親切な方です。高貴な心と真のブルトン人の心をお持ちです。あなたの友情と国を想う悲しみがどれほど私を感動させたか、どう表現していいか分からないほどです。なぜ私はあなたの側にいないのでしょうか。なぜ私はあなたの手を握ることができないのでしょうか。あなたは私の目に涙を見るでしょう。それは私の言葉以上にあなたに多くを語るでしょう。ああ、どんなに私は涙を流したことでしょう。しかし神のお慈悲によって、私は祈りのなかに平静を、許しのうちに大きな慰めを見出したのです。長い間、私はそれができませんでした。というのも、私には友がいたからです。いま私は、自分のために神に求めることの代わりに、神に何かを与えることを光栄に思っています。それはたぶん人がそれと気づかず私に施してくれたことなのです<sup>(19)</sup>。

見ての通り、手紙の内容はサラウンに対する率直な感謝の気持ちであり、直接的に「バルザズ・ブレイス論争」に触れるものではなかった。しかし、この論争のなかでラヴィルマルケがほとんど言葉らしい言葉を残さなかったことを考えると、この手紙は渦中における彼の内面を窺うことのできる数少ない貴重な資料であると言えた。なによりも、それは彼の

うちで起きつつある心の変化と信仰の深まりを伝えていた。二年半ほど前に、彼が最愛の妻を失ったことも関連していたのだろうか。いずれにせよ、彼は病に苦しむ妻に自分の歌集をめぐる騒動を知られるのを何よりも恐れていたという<sup>(20)</sup>。もちろん、それが論争における彼の態度に与えた影響もけっして小さくはなかったろう。

いま一通は、このラヴィルマルケの手紙と同じ日付をもつ、ルメンからの手紙である。すでに見たように、一八六七年に出版された『カトリコン』の「序文」で、サン・ブリューの国際ケルト大会に混乱をもたらしたこの人は、言わば「バルザズ・ブレイス論争」をスキヤンダルにした張本人であった。彼はサラウンに宛ててこう書いていた。

五年前に『バルザズ・ブレイス』の問題を論じていたときの私の意図は、ただ学者たちに、その文学的価値は疑いなが、われわれのナショナル・ヒストリーの資料としてはもはや数えられない詩の真正性に注意を促すことでした。私の目的は思うにかなり速やかに達せられましたので、新たな反ラヴィルマルケ・キャンペーンを行うことは意味がないように思えました……。サン・ブリュー・レ・シユーにおける先の会議のメンバーたちも私と同じ意見であったように見受けられます。彼らが正当にも時宜を得ないと判断したリューゼルの報告を論集に載せることを拒否したのですから。(……) 私は一年程前にリューゼルとは完全に縁を切ってしまったので、いったいどんな動機で彼がその「報告」を書いたのかは分かりませんが<sup>(21)</sup>。

リューゼルがルメンと文通を始めたのは一八六五年のことであった。が、この手紙にあるように、それは一八七一年に終わっていたらしい。しかも文面から判断する限り、ルメンはこの時期にはすでに論争に関する大半の興味を失っていたと覚しい。その酒好きからリューゼルに「アルコール度の高い古文書保管人<sup>(22)</sup>」と呼ばれ、友人の民俗学者のソヴェカ



らは「怒りつぱく、妬み深く、皆の悪口を言い、すべてを毒舌で汚す<sup>(23)</sup>」と評されたルメンの性格については、すでに『カトリコン』の「序文」の口調からも明らかだったが、その一端はこの文面にも十分に現れていると言えるだろう。いずれにせよ、この手紙はリューゼルとルメンの『バルザズ・ブレイス』に関わる根本的な姿勢の相違を伝えて興味深い。

もう一通、サラウンの手元にはきわめて重要な手紙があった。それは『バルザズ・ブレイス』の重要な協力者として知られるアンリ神父からの手紙である。十月二十五日付でカンペルレの救済院から送られたその手紙は、フランス学者協会がリューゼルの発表の書評を大会の報告集に掲載しなかったことに対して、「私の意見では、これは内容からも形式からもそれに値するものではない」と述べてから、リューゼルの論考に見いだされる「大きな誤り」を四つ列挙していた。

その一、ド・ラヴィルマルケ氏は一八三九年に初版を出したとき、まだ二〇歳から二五歳の間でした。この年齢で、リューゼル氏が二五ページで確認もせずに彼に帰している準備をすべてすることができたでしょうか。保証しますが、この時代、ド・ラヴィルマルケ氏はたった二行の歌の節を作るのに六つも間違いを犯すほどブルトン語を知らなかったのです。(……)

その二、二〇歳であらゆる点で傑出した詩を二五篇も作ったとすれば、ド・ラヴィルマルケ氏に比べればマクファーソンもウォルター・スコットもまだまだ小者ということになるでしょう。

その三、『バルザズ・ブレイス』の歌は、それを作ったバルドたちがいまのブルトン語と同じブルトン語を話していなかったのだから、古くもなければ本物でもない主張するのは、まったくの言いがかりです。(……)もし私が受難劇をいまのブルトン語に直したら、その受難劇はそもそも存在しなかったということになるのでしょうか。

その四、『バルザズ・ブレイス』の歌があまりに古風ですって。まずこうした歌は木靴や大きなキュロットを身につ

けたホメロスによって作られたものではないのです。それにド・ラヴィルマルケ氏は、当時の吟遊詩人によっておかしく歌われたり書かれたりしていたテキストを、真つ当なものにするために細心の注意を払ったことを否定してはいません。一般の歴史やその英雄たちが歌の対象になることは滅多にないとリューゼル氏は言います。たしかに現代のトレギエの歌い手にとってはそうかもしれませんが、バルドたちの時代にはそうではなかったのです。(……) あなたはこう言っています。たとえ『バルザズ・ブレイス』の歌が模作であると仮定したとしても、リューゼル氏は、愛国心のためにも友人のためにも、このような批判をするべきではなかった、と。が、私は皆と同じようにこう言います。われわれはプラトンの友であるが、それ以上に真理の友である、と。しかし、リューゼル氏の小冊子のなかに真理はなく、彼の心には友愛もありません<sup>(24)</sup>。

アンリ神父の目的は、もちろんラヴィルマルケの擁護にあつた。しかしこの手紙の幾つかの発言は、それがもし批判者の目に触れて異なつた文脈のなかで読まれれば、逆に『バルザズ・ブレイス』の信頼を失墜させることにもなりかねない性質のものであつた。なかでも、若きラヴィルマルケのブルトン語の知識に関する発言はそうだった。にもかかわらず、サラウンはその年の十一月に『オセアン』紙上で行つたリューゼルに対する批判のなかで、あろうことかこのアンリ神父の告白の一部を引き合いに出してしまふ。十二月、民俗学者のソヴェはアンリ・ゲドスにこの論争についてこう報告した。

貴殿もたぶんご存知のリューゼルは、『バルザズ・ブレイス』というきりのない問題について友人のサラウンと一戦を交えたところです。(……) 議論はしかし無益なものにはならないでしょう。というのも、おかげでアンリ氏から、『バルザズ・ブレイス』の初版が出版された当時、ド・ラヴィルマルケ氏はブルトン語を知らなかったという発言を引き出

すことができたのですから。

この点については、大バルドが自ら逆の主張をしていることに注意してください。初版の「羊飼いの祭り」の「論拠」には、こんな風に読めます。「子供の頃、何度この歌を耳にしたことだろう。老いた羊飼いの一団が歌っていたのだが、当時私たちはブルトン語以外の言葉を話せなかったのだ」。

二人のうちどちらが間違っているのでしょうか。あるいは、どちらがわれわれを騙そうとしているのでしょうか。たぶんド・ラヴィルマルケ氏の方です。なぜなら彼はそれ以後の版ではこの文を削除する方がいいと判断したのですから。しかしこのミステリーは何なのでしょう。「真実」はブルトン人を恐怖させるので、彼らはその問題に正面から向き合おうとすることができないのです<sup>(25)</sup>。

ラヴィルマルケの『バルザズ・ブレイス』は偽作であるばかりではない。著者はそもそもブルトン語さえろくに知らなかったのだ。リユーゼルが「バルザズ・ブレイス論争」の表舞台に登場した一八七二年は、この意外な噂とともに暮れたのである。

(つづく)

## 註

- (1) François-Marie Luzel, *De l'Authenticité des Chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*, F. Vieweg, 1872, p.3.
- (2) *Ibid.*, p.5.
- (3) この問題をについてリューゼルはこう付言している。「この非常に曖昧な問題を幾分でも明らかにするための真の方法は、バルドで予言者であるグエンフランの詩を含む手稿を出版することかもしれない。一八三五年から三六年にかけて、新聞や雑誌は、それがコルヌアイユの古い教会で、若いブルトン人の学者によって発見されたと伝えたのである」(*Ibid.*, p.7)。この「若いブルトン人の学者」とはもちろんラヴィルマルケのことである。このエピソードの詳細については、拙論『ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生(三)』、鹿児島大学学法文学部紀要、第五号、二〇〇二年、八〇一八五頁を参照のこと。
- (4) *Ibid.*, p.8.
- (5) *Ibid.*, pp.9-10.
- (6) *Ibid.*, p.11.
- (7) *Ibid.*, p.14.
- (8) *Ibid.*, p.26.
- (9) *Ibid.*, p.30. この種の歌として、リューゼルは「グエンフランの予言」、「イスの町の水没」、「ガリア人のワイン」、「アーサー王の行進」、「メルラン」詩篇、「レズ・ブレイス」、「ノミノエの租税」など、二〇篇ばかりの詩を挙げる。
- (10) *Ibid.*, pp.42-43.
- (11) *Ibid.*, p.45.
- (12) Francis Gourvil, *Théodore-Clau de-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.234.
- (13) *Ibid.*

- (14) *Ibid.*, p.235.
- (15) *Ibid.*, p.236.
- (16) *Ibid.*
- (17) *Ibid.*, p.238.
- (18) このことを嘆く声は当時からあった。たとえば、サラウンの書評を読んだ民俗学者のソヴェは、彼に宛てた一八七二年十一月四日付の手紙で、それを「驚きと悲しみをもって」読んだと伝えた後、次のように書いている。「私にはあなたが純粹に学問的なものにしておかねばならない問題に政治を持ち込むことによって、議論の道を逸らし、無益に悪化させてしまったように思えます。政治はここでは何の關係もありません」(*Ibid.*, p.240)
- (19) *Ibid.*, p.237.
- (20) *Ibid.*, p.201. 一八六八年四月にガブリエル・コンペレがアンリ・ゲドスに宛てた手紙に書かれている内容よる。
- (21) *Ibid.*, p.237.
- (22) Françoise Morvan, *François-Marie Luzel, Enquête sur une expérience de collecte folklorique en Bretagne au XIX<sup>e</sup> siècle*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1999, p.120.
- (23) *Ibid.*
- (24) Francis Gourvil, *op.cit.*, p.239.
- (25) *Ibid.*, p.243.